

特別活動部会

県研究主題

望ましい集団活動を通して、生徒一人ひとりの自主的、実践的な態度の育成と豊かな人間関係をはぐくむ指導の充実と、評価の工夫・改善

提案1

提案者 庄司 知洋（県央地区）

<研究主題>

集団活動の中で自己を生かす能力を養うための生徒会活動の工夫

— 下級生・小学生への情報モラル教室を通して —

1 提案内容

神奈川県警察本部からの依頼で、中学生を話し手として小学生に向けて行った情報モラル教室の取組について発表された。

(1) 研究構想

学校教育目標

- ・豊かな心
- ・確かな学力
- ・望ましい生き方

生徒会活動目標

全校生徒によって組織される生徒会において、より良い学校生活の創造に向かって意欲的に活動する生徒及び生徒集団を育成する。

生徒の実態

明るく素直な生徒が多く、学習・行事・部活動等だけでなく毎日の清掃活動や係活動にも手を抜かずに取り組む生徒が多い。一方、望ましい人間関係を構築することを苦手とする生徒が少なくない。

研究主題

集団活動の中で、自己を生かす能力を養うための生徒会活動の工夫

研究主題に迫るための手立て

下級生・小学生などの異年齢集団に対して活動を行うことで、自己を生かす能力が養われると考えた。

他の人の役に立てた、喜んでもらった等の自己有用感が育まれることで、自分に自信が生まれ、主体的に望ましい人間関係を構築するきっかけとなるだろうと考えた。

(2) 生徒会本部の生徒の活動内容

8月（夏休み中） サイバーボランティア養成講座受講

警察の方から情報モラルについての講話を聴き、下級生・小学生に対する語り手としての資格を取得

8月（夏休み中） 情報モラル教室練習

資料をもとに主体的に下級生・小学生に向けた話し方や内容について考える

8月31日（水） 情報モラル教室①

校内で1年生に対して情報モラル教室の実施

アンケートの実施

9月23日(金) 情報モラル教室②

学区の小学生に対して情報モラル教室の実施

アンケートの実施

(3) 成果と課題

成果としては、主体的に考えて行動した活動は、生徒の自己有用感を高め、次の活動に対する力となった。その例として情報モラル教室の経験を生かして10月に行われた文化発表会の『諸注意』を自ら主体的に考え保護者に向けたSNSのトラブルの未然防止を呼び掛けることができた。

また、小学生に対するアンケート結果から「私も中学生になったら今日のお兄さん、お姉さんのようにしっかりとわかりやすく話したいです。」というように発表した生徒の自己有用感につなげることができた。

しかし、課題としては、大人の方がわかりやすいという声上がるなど、『人に伝える話し方』に課題も残った。

2 研究協議

(1) 本活動を通して

小規模校としての「生徒同士の馴れ合い」を打開するためには、何か新しい活動を意図的に取り入れていく必要があると考えた。「馴れ合い」を打開するためにも異学年交流のやり方を工夫したり、生徒が前に立って話をする機会を多く作ったりしていくことは大切である。

(2) 新しい活動を通して

この経験を生かして、本部役員が考えた異学年交流を可能にした「学び愛活動」を始めることができた。異学年交流を通して、多様性を認め人のことを思いやる気持ちが育ち、やがて学校から社会に出たときに生きていく力がつき、民主的な社会を作り出す力(社会参画)となることを期待している。

3 まとめ

まず、本活動は生徒から提案された活動ではない中で、どう生徒が関わるか、そして生徒をどう関わらせるかが大切なことであった。しかし、学区の小学生を対象に「情報モラル教室」を開くことは、地域社会の一員としての活動といえ、まさに意図的・計画的に社会参画を意識した取組といえる。

また、本活動が、事後の学校生活にも生かされていた。望ましい人間関係を構築するだけでなく、よりよい学校生活づくりに参画する生徒の姿を見て取ることができた。

提案2

提案者 塚本 恵子(相模原地区)

<研究主題>

所属感や連帯感を深める学校祭合唱部門への取り組みを目指して

1 提案内容

平素から取り組んでいる歌声活動で、生徒どうしが関わりを深め合える実践を研究し取り組めば、学年への連帯感や所属感を育むことができるのではないかと。また、学年の一員として力を発揮しようとする姿勢を育てることができるのではないかと。集中して歌声活動に取り組む学校祭合唱部門は、実践を通して生徒が考え自己を振り返る良い機会であると考え、研究テーマを設定した。

(1) 以下の仮説を立て、(2)の「C 実践活動」を行った。

- ① 目標設定と振り返りを取り入れていくことで、生徒が自己の変容を実感し、意欲的な態度につながるのではないかと。
- ② 振り返りの中に自己だけでなく仲間や他者への関心がむくような工夫をすれば、仲間と前向きな関わりをもとうとする気持ちを育てられるのではないかと。
- ③ 「学級」からさらに「学年」を意識させる取り組みができれば、生徒たちが連帯感や集団の一員としての所属感を感じられるのではないかと。
- ④ 話し合い活動を取り入れることで集団の一員として所属感を高め、協力する態度が育つのではないかと。

(2) 研究方法と内容

A 合唱部門のプログラムの見直しを行った。

平成27年度までは、学年合唱の後に学級合唱を行っていたが、平成28年度は、「発声のための学年合唱」ではなく、「学年の力を発揮するための学年合唱」へと意識を変えるため、学級合唱の後に、学年合唱を行うよう生徒総会で話をした。

B 歌声活動に対する意識調査を6月、10月、3月に実施した。

C 実践活動

I) 目標設定と振り返りシートへの取組(仮説①、②)

【1】「身につけたい力」と「個人目標」「学級目標」を設定する。

【2】活動後、「身につけたい力」について自己評価を行う。

【3】「心に残ったエピソード」には、学級の様子や仲間の良かった点を書く。

考察：生徒自身がそれぞれの活動において観点を明確にして自己を振り返ることができていた。最後に点数をグラフにさせたことで、生徒自身が自己の変容を可視化することができていた。エピソードの記入は、生徒が他者への視点を持つきっかけになったと実感した。

II) 話し合い活動と学年集会(仮説③、④)

【1】「学校祭における学級目標」の達成率について体育部門後と合唱部門後に話し合う

【2】学級で話し合った内容を、学年集会で共有する。

【3】議長会議を開き、全ての学級で同じ流れで話し合いを行う。

考察：生徒どうしの学校祭への思いや考えを共有し、学級全体で目標を明確にすることができた。学校祭の反省点や今後の取り組みの様子が分かり、互いに刺激しあう場となった。お互いの学級への関心も高まっていた。

III) 生徒の主体的な計画と運営による活動(仮説③)

【1】「学級」という枠をはずして「学年」を動かす企画、運営をする。

【2】練習の計画と反省の話し合いを持ち、有志練習会への参加者の拡大や学年練習会の持ち方を考える。

考察：「もっと学年合唱をよくしたい」と思う生徒たちが「学級」を越えてつながりを深めることができた。歌声委員による昼休みの練習会は、生徒たちの関わりを生み、「仲間に協力」することについて考える機会になった。生徒たちがより良い「練習会」を目指すようになったのも大きな成果であると感じる。

2 協議内容

- (1) 振り返りシートや、みかんの木などで、変容が見られてよかった。外での合唱練習等、場の工夫がよかった。エピソード記録が具体的でわかりやすく参考になった。
- (2) 合唱部門のプログラムの見直しで、反対意見があったのではないかと。どのように進めたのか。
→まずは、前年度の合唱祭が終わった後に反省を出した。先生方の気持ちを変えるのが大変だったが、生徒からも不公平ではないかという意見が出て、変更に至った。
- (3) 有志での練習に取り組んでいたが、クラスでの昼休みの練習はあったのか。
→昼休みは生徒の取り合いになる（様々な活動を行いたい委員会などもある）ので、学年練習の3日間だけ行った。クラス練習は、学級担任任せで、放課後に練習しているクラスもあった。
- (4) 有志の練習を行うときなど、職員間の理解が難しいと思うが、どのように行ってきたのか。
→早めの計画、立案が大事だと思っている。学年会での提案は上手く伝えられたが、全学年まではなかなかできなかった。職員会議などで成果なども含めて粘り強く伝えていく必要があったように思う。
- (5) 「あふりね」講習会はどのような内容だったか。
→3年生の歌声委員、代議、パートリーダー等が1年生に歌のできた歴史などを説明した後、そのあとパート別に分かれて練習を行っている。その間2年生は全員で合唱練習などをおこなっている。3年生はパート練習等を行い、リーダーが戻ってきたら、講習会の様子を報告する活動を行った。
- (6) 目標設定の仕方はどのように行っているのか。学級目標との繋がりを考えているのか。
→まずは、学級目標の確認を行った。学級目標を達成するために、仲間と共に達成したいことを考え、学級目標に近づくための合唱目標を設定するように心掛けた。

3 まとめ

- (1) 学びを可視化して自己の変容をつかむ
 - ・大切な事は、個々の成長をどう見ていくか手立てが必要である。そのために、目標を個人レベルまで決めること、一言日記で記録、数値化して意欲の変容を見ること、ポートフォリオとして学びを見取することは新学習指導要領でも大切にされている。
 - ・特に意欲や態度を見取るには、活動を通して変容を見ていくことが必要である。
 - ・国学院大学の杉田教授の話から「子どもが評価されたいと思っていることを評価することができているか」という話があった。教師サイドの見方で、子どもを評価してしまうことがあるが、子どもがどう感じて、どう評価されたいかを把握しないと伸びていかないのではないかと。
- (2) 資質・能力を高めるためには、「主体的・対話的で深い学び」を実現させる必要がある。
 - ・社会参画（学級から学年・学校に広げ、自治を高める）、人間関係形成（歌声リーダーと一人ひとり）、自己実現（振り返り等）の3つの視点が大切であり、その3点が上手く絡んで高める活動になっている。
- (3) 活動をよりよくする教師の姿勢について
 - ・「何の為にしているのか」「どのような生徒を育てたいか」をしっかりと見定めて計画していくことが必要である。